PROLOGUE 超・早解り「横浜市民生活白書」

横浜の原風景は、内陸部の谷戸景観と臨海都心部の港の光景

1 横浜市民生活白書とは―生まれたのは1964年

横浜市で最初の市民生活白書が発行されたのが、1964年。飛鳥田市政が誕生した翌年です。自治体が市民生活の現状や課題を客観的かつ科学的に把握し、そのことを市民に向けて赤裸々に情報発信する白書を独自に発行すると言うこと自体が、当時としては革命的なことでした。

「横浜市の毎年の人口増の約3分の2が社会増であるが、その大部分が東京から移転してきた人たちである。東京のなかに人口があふれ、住む家と、明るい空と、緑を求めて、東京からあふれだしてきた人たちである。そしてこの人たちは、やっと横浜に住む家を見出してほっとしたとき、つぎに横浜はいかに人間が住むに不自由なところであるかに気づき、がくぜんとするのである。そのことは、東京からの転入者ばかりではない。横浜に生まれ横浜に育った人たちも、長い間そうした不自由をじっとガマンしてきたのである。」

「川崎とならんで横浜の既成工業地帯である鶴見区に住む人々も、ひどい生活環境のなかにおかれている。降下ばい塵量が一ヶ月に20トン以上という地域がたくさんあり、市民の健康をむしばんでいる。磯子、金沢の地域はどうだろう。かつての海水浴場が汚れた海に変わってしまったのはともかくとして、根岸湾の埋立ては、市民から自然海岸線を奪ってしまった。港ヨコハマのなかで、日本唯一の臨海公園として市民の憩いの場であった山下公園は、いま山下ふ頭への貨物引込線のために、公園の価値が半減しようとしている。市長に送られた約1万3千通の市民からの手紙の一つ、一つ、そして毎日区役所、市庁にあらわれてくる市民の声は、市民の生活環境がいかに不完全であり、その改善がいかに切実なものであるかを示している。」

以上は、いずれもこの最初の市民生活白書「新しい横浜への展望」から原文のままランダムに抜き書きした文章です。これまでの地方役場の文書ではあり得なかった、市民の側に立ち市民の目線で、ありのままの市民生活の現状を語る言葉が持つ迫力。

この最初の白書は、都市としての急激な成長・拡大期の入り口に立つ横浜の苦悩する姿をありのままに映し出す共に、その後、長く続いた成長・拡大の時代に、この国の都市政策のありようを根本から革新する様々な施策や事業が、なぜ横浜から生まれたのかということを解き明かす、今ページをめくってもドキドキする内容の一冊となっています。

この『新しい横浜の展望』以降、横浜市は、ほぼ3～4年ごとに市民生活白書を発行し続け、2001年に発行した最新の白書『よこはまの暮らしやすさ。』で実に10冊を数えます。

駅はまちの活力の源―今も昔も人と情報が往来する場所

2 市民生活白書のテーマ―非「成長・拡大」の時代における変化と変革

11冊目となるこの「横浜市民生活白書」のテーマは、非「成長・拡大」の時代における市民生活と都市・横浜の変化を描き出すことです。60年代以降、四半世紀以上も続いた「成長・拡大型の社会」が90年代中頃から機能不全と制度疲労を起こし、泡立ち始めていた社会変化の予兆が、21世紀に入ると、本格的な「変化の波」となり、私たちの日常を呑み込み始めています。私たちが依って立つ家族や仕事、学校、地域社会において、それまで誰もが当たり前だと考えていた社会通念や慣習、常識が通用しなくなっています。今回の白書の重要なミッションの一つは、このような非「成長・拡大」の時代の変化の実相とそれによって引き起こされる市民生活の様々な課題をありのままに、具体的でリアルな「数字」と「事例」と「言葉」で描き出すことであると考えています。最初の市民生活白書「新しい横浜への展望」がそうであったように。

もちろん、状況の深刻さを憂え、課題を投げ放しにするだけでは、市民生活の安心と安全を支える自治体の発行する刊行物としては、きわめて不十分といえます。

今回の白書のもう一つのミッションは、横浜市民や行政が、どのようにこれらの課題に臨み、自らの「生活」や「地域」をいかに豊かにし、また再生しようとしているのか、その取り組みについて取材し、明らかにすることです。そして、それらの取り組みをこの非「成長・拡大」の時代を切り拓いていくための未来への道標、勇気の糧として、出来る限り多くの横浜市民と共有化すること。さらには、これらの取り組みを「横浜型パイオニア・モデル」として知的財産にまで昇華し、日本列島の他の自治体や、東アジアを中心とする世界の都市に向けて情報発信することです。

都市にとって大切なことは、
人と人とのコミュニケーション

横浜の海はいろいろな「顔」を持っている

3 市民生活白書の内容と構成―3つの大きなテーマに沿って

この「横浜市民生活白書」では、非「成長・拡大」の時代とは何かという問いに発して、私たち横浜市民が臨む社会の変化と課題、そして解決の方向性が、大きく以下の3つのテーマと仮説に従って展開されます。

「標準的な家族像」の解体と求められる「共助の場」

世帯規模と家族機能の縮小によって「標準的な家族像」が解体。市民のライフスタイルや人生設計も多様化している。行政や企業がこれまで担ってきた日本型公的扶助の機能も縮小する中で、地域コミュニティでは子育てや高齢者介護、青少年の自立のための場づくりの試みも始まっている。さらに「内なる国際化」への対応や帰って来る団塊の世代への受け皿づくりなど、求められるのは多世代・多文化共生型の市民相互の「共助の場」である。

「まだら模様の人口減少社会」の到来と求められる「持続可能なまちの環境」

大都市・横浜において「人口減少社会」はまだら模様で訪れる。地域によっては、急速な少子高齢化を伴う人口減によって、市民が今住む街で暮らし続けることが困難になる状況も予測されている。一方で防災・防犯や自然環境の保全創造、地産地消、公共交通手段の確保や情報格差の解消など住民自らが主役となった街づくりの試みも始まっている。求められるのは、住民が暮らし続けることができる持続可能な街の環境の形成である。

「社会経済のグローバル化」の進展と求められる「横浜の再発展戦略」

社会経済のグローバル化によって、創造性と異文化コミュニケーション能力を持った国際人の育成が急務になっている。また知的財産の保護や横浜オリジナルの製品開発など地元の中小企業の国際競争力を高めていくことや、横浜ならではの歴史文化資産を生かした文化芸術活動を活発化させるなど都市としての魅力を高めることも重要になる。求められているのは横浜が都市間競争に勝ち残り、自立的に再発展するための戦略である。

第３部
横浜の未来を切り拓くための Q&A

第1章 多様な暮らしを支える共助の場

●乳幼児を持つ親と子どもの居場所がない。
子育て支援の場を地域の中でどのように形成するのか

●学齢期の子どもたちが地域で安心して遊び、学び、暮らす場を誰がどのように創るのか

●青少年が自立するための多様なセーフティネットをどのように形成するのか

●地域社会に「団塊の世代」があふれ出す。
はたして彼らの居場所はあるのか

●高齢者が急増する中でも安心して暮らすことのできる多様な介護の仕組みづくりは可能か

●病気や高齢、失業などで生活に困った時に、地域社会は、助けてくれるのか

《コラム》
私たちの居場所を求めて
非「成長・拡大型」の時代の「共助の場」

第2章 住民が主体的に創る持続可能なまちの環境

●地震や犯罪が不安だが、
防犯・防災にどのように取り組めば良いのか

●横浜ならではの森・川・海の自然環境をどのように保全・継承・創造するのか

●全国各地で農産物直売所ができているが、横浜ではそのような動き（地産地消）はないのか

●地域住民が主体となる公共交通手段とはどのようなものか、どのように運用されているのか

●情報格差（デジタル・デバイド）とは何か？
なぜ解消しなければならないのか

《コラム》
多機能でコンパクトな持続可能なまちを創る
横浜郊外再構築への道

第3章 開港都市・横浜の再発展に向けた総合プロモーション

●グローバル化時代の人材育成に対応する公立学校をどのように創るのか

●経済社会のグローバル化によって、横浜経済の自立が急務になっている。市民に支持される新しい経済政策の確立は可能か

●国際観光都市としての魅力を高め、海外も含めて横浜に交流人口を呼び込み文化経済を活性化するにはどうすれば良いか

《コラム》
国際港都・横浜再発展への点火　開港150周年の夢

文化芸術で都市を創造する

なおこの白書の構成は、エピローグとプローローグを除くと基本的に3部構成となっています。

第1部の「12のエピソードで描く変わる横浜の市民生活と都市の姿」では、成長・拡大型社会が終焉し、非「成長・拡大」型社会が到来する中で、市民生活のありようや横浜の都市構造がどのように変わろうとしているのかということを、12の具体的なエピソードや事件、データによって描き出します。

第2部の「横浜型録（カタログ）2006」では、非「成長・拡大」型社会における市民生活や地域の多様性を統計データによって実証的に分析すると共に、カタログ式にわかりやすく提示します。まず標準的な家族像の解体によって多様化する市民の暮らしを8つの家族像で分類説明。さらに「まだら模様の人口減少社会」の到来によって多彩になった横浜の地域の姿を4つの都市圏域と7つの駅圏類型、16の市街地類型に分類し、それぞれの課題や資源のありようを最新のGISの手法などを駆使してビジュアルに表現しています。

第3部の「横浜の未来を切り拓くためのQ&A」は、非「成長・拡大」の時代においても横浜の市民生活や都市が持続的に発展していくための14の重要課題を「未来への問い」として設定し、それぞれの現場の実践によって、「問い」に対する「答え」を導き出そうと奮闘する開拓者達の取り組みを、37のパイオニア・モデルとして紹介しています。

読者は、この頁の「市民生活白書　早わかりフロー図」に従って、白書の中でも自分が興味を持つテーマや分野から読み進むことができるようになっていますし、時間のない読者のために、飛ばし読みがしやすい編集構成にもなっています。もちろん、最初のページから順番に、160頁を読み通していただいた読者には、それ相応の感動が得られる構成と仕組みになっていることはいうまでもありません。

第1部
12のエピソードで描く 変わる横浜の市民生活と都市の姿

標準的な家族像の解体と共助の場

1.広がる将来への不安

2.縮小し解体していく家族

3.主役は団塊のジュニア世代

4.「希望格差社会」を超えて
Y校と鶴工の生徒たちへのインタビューから

まだら模様の人口減少社会と持続可能な街の環境

5.帰ってくる団塊の世代

6.「開港都市」と「第四山の手」
東京からの自立は可能か

7.まだら模様でやってくる横浜の人口減少社会

8.横浜が「国際都市」となるために
中区中華街と鶴見区潮田

社会経済のグローバル化と横浜の再発展戦略

9.ユビキタス社会の新しい市民自治

10.「食の都」のリスクコミュニケーション

11.それは根岸湾から始まった
公害対策横浜方式と環境行動都市

12.横浜は『萌え』ているか？
文化芸術創造都市への道

第2部
横浜型録（カタログ）2006

あなたの横浜市民度チェック

家族のかたちで見る横浜の市民力

8つのタイプで見る横浜の家族像

Since―1964
私たちはどこまで来て、どこへ向かっているのか

ズームレンズで見る横浜の都市力・地域力

4つの都市圏域で見る横浜

7つのタイプで見る横浜の駅圏・駅力

16のタイプで見る横浜の市街地

横浜の街の姿と人の暮らしは十人十色

4 白書の創られ方―市民との協働編集

今回の市民生活白書の特色の一つに、市民との協働があります。

一例を上げれば、「横浜の内なる国際化」をテーマに(財)横浜市国際交流協会のトラベルライター養成講座の受講生有志が取材クルーを結成。外国人市民が多く住む鶴見潮田地区など実際に街の現場に赴き取材しながら、白書の原稿をまとめています。また、白書の表紙やこのプロローグの写真撮影では、プロのカメラマンが全くのボランティアとして企画段階から参加。変わり行く横浜の街の今を撮影してくださっています。さらに、第2部の横浜の都市力・地域力の「駅圏・駅力」の分析手法は、横浜国大の佐土原・吉田研究室のみなさんと協働で開発したものです。

このように取材対象ということだけでなく、自らが制作の主体となり、「俺たちの白書を一緒に創ろう」という「志」を分かち合う市民とともにこの白書は創られています。

何よりも、この4年間で、それぞれが固有の名前と歴史を持つ横浜の彩り豊かなコミュニティの場で、共助のための地道な活動を展開する実に多くの市民の方々と出会い、それぞれの現場から横浜のまちや都市をどうしていくのかという議論を重ねてきました(ここで紹介させて頂いたパイオニア・モデルはそのうちの一部です)。

この市民生活白書の編集内容には、その一人ひとりの市民の思いを、できる限り反映したつもりです。

5 白書の発行主体―横浜市と神奈川新聞社との協働発行

今回の白書は横浜市と神奈川新聞社との協働発行です。したがって、よくある行政の刊行物のように行政の視点だけで、統計データを分析したり事業を紹介するというスタイルでなく、時には、第三者の視点で行政の事業も市民の活動も同じ土俵に並べて論評しています。

たとえ行政にとって都合の悪いことも、あえてジャーナリスティックに取り上げていくというスタンスをとっています。このことも今回の白書の編集発行にあたっての意欲的な試みであると私たちは考えています。

最後にこの白書は、何よりも横浜の未来を切り拓く「高校生」にこそ読んでもらいたくて編集されています。もちろん、ここでいう「高校生」とは、実年齢ではなく、この白書に登場する17歳や87歳の市民がそうであるように、物事の本質を深く考え、世界の変化に対して新鮮に驚くことの出来る感受性を持ち続けている人たち。現実の困難な状況にも立ち向かい、時にはうまくかわしたり、すり抜けたりしながら、決して明日への希望は失わない―そういう個性を持った市民すべてを指しています。

この白書を通じて、世代や地域や思想信条を越えてこのような市民の輪が広がっていくことを何よりも願っています。

横浜市民生活白書　編集部